

冷たき牧歌

——キーツの「ギリシヤの壺の賦」によせて——

永井豊実

(H)

キーツ (John Keats, 1795-1821) の「美は真なり、真は美なり」(Beauty is truth, truth beauty) という「ギリシヤの壺の賦」(Ode on a Grecian Urn, composed May 1819; with *Lamia*, published in 1820) の言葉は、あまりにも簡潔過ぎている故に、美は真なのであろうか、真は美なのであろうかという疑問にとらわれる。こういう疑問に対して、ブルックス (Cleanth Brooks) 氏は、「キーツの森の歴史家」(Keat's Sylvan Historian: History Without Footnotes) の中で、あまりにもこの孤立した文章だけにこだわり過ぎているのではないか、もう一度詩の前後関係に立ち戻ってみて、全体の文脈から検討しなければならぬのではないかと警告している。この言葉だけを取り出して理解しようとするよりも、この言葉が発せられた必然性を先ずもって理解することの方が、最初ではないかというのである。

美と真の関係について、何を主張しようと望んだのかということではなくて、美と真との関係を例証することができたかどうかである、とブルックス氏は続けて言っている^①。美とは何か、真とは何かと問い正すよりも、美と真の関係がどう言及されているかを考察してみることの方が、理解に行き届くのではないかと思う。

そこでこの詩について、順を追って解釈する前に、前もって美の見方についてここで理解しておきたい。「美は真なり」という場合に、例えば自然の対象を見て美しいと思ったとする。それは見る者の感覚を通して表われ出た感動であり、情緒である。現象によって与えられた心の動きが見る目を持ったのである。そして感覚的に捕えられた美の対象に向って、目を見開くのである。美は美しいと認めた現象や実体の見る者の心の反映であると言える。芸術美には更にそれが強い。物の本質を捕えて、そこに人間感情の本質を具現化しようとした芸術作品そのものは、正に美そのものを伝えようとする。美は人間の生の反映であると言えよう。自己の主體的な見る目によって、永遠なるものを得ようとするのであるから。「すべての美しいものは美によって美しいということだ^②」とプラントが言うならば、美そのものが永遠不変なものでなければならぬ。時の移りによって果敢なく消えていく自然現象は永遠ではない。しかし美を認めた時点において、その美は人間によって認識されうる限り、美はその時点から時間の推移を離れている。美は普遍なものとして真でなければならぬ。真は永久不変であるからである。そこで「真は美なり」という言葉の場合、永久不変なる真が、人間感覚や情緒に、直接美として訴えてくるであろうか、あるいは現象や実在の中に含まれている真が美を呼び覚ますであろうかという疑問が起る。在るが儘の姿の中に真実を見出し、その真実がはたして美を表わしているかどうかである。實在が真ではない。現象が真ではない。真であると認める人間の存在と結びつくかどうかである。真が如何に真として見る人の心に美を呼び覚ますかである。不快感や醜も美的範疇に入るとしても、美を呼び覚ます主體的な創造作用が必要である。そこで如何に客体と自己が係り合いを持つかに係ってくるのである。

(一)

汝、今だ穢れを知らぬ静寂の花嫁よ。

汝、沈黙と遅き時の流れが、慈しみ育ててきた子供よ。

(第I連1—2行)

こう呼びかける時、静かに横たわる壺の实在を認め、静寂である壺のたたずまいに長い歴史の時の流れを感じ、そこに依然として存在している壺の实在リアリティを認識するのである。壺は静寂の姿でいる。生物としての生命は無いが、時の流れに存在し続けている。生れた時と同じ状態を保つ永遠の現在を保っている。实在の中に凍結された現在は壺に描かれた絵によって表出されているのである。实在とそこに表出された美とを捜し求めることになる。

森の歴史家よ、あなたは私達の詩よりも、

更に更に美しい花のような物語りを

語り伝えることができるのだ。

(第I連3—4行)

と「森の歴史家」(sylvan historian)である描かれた自然の絵や風景や人物と語り合うことになる。甘美な感覚の陶酔の中に浸ることは、客観的な存在の中に没入しなければならぬ。感覚的に美しいと覚えた対象は美を有する実在者として存在する。壺は総体的に美を有する実在者である。美しい絵といった現象の保持者として存在する。後に「美しい姿態よ」(Fair attitude)と呼びかける時、現象から目覚めた時に見た壺の総体的な美しさに感嘆するので

ある。美しいと思うものへ、意識の集中と想像的体験によって、如何に生きているか、如何に存在しているか、というように問いかけが行われていく。「森の歴史家」を通して、想像的な問いかけをする内に、凍結された絵の現在が再び甦ってくるのである。

どんな伝説が、木の葉に縁どられて、髪髯として語られるのだろうか。

テンペやアルカディアの谷に住むという神々や人々や、

また半神達について。

どんな人々や神々なのであろうか。どんな女達が嫌っているのであろうか。

どんな狂おしい求愛なのであろう。どんなに逃れようともがき闘うのであろう。

どんな笛や太鼓が打ち鳴らされるのであろう。どんな荒々しい陶酔があるのであろう。

(第I連5—10行)

こう疑問が投げかけられることによって、既に絵の姿と動きの程度にまで、想像が入っていく。絵の実相を浮び上らせることになる。嫌うこと、狂おしいこと、打ち鳴らすこと、荒々しい陶酔に浸ること、等はすべて生きている人間の夢中の動きである。こうした絵の中の人物に感情を追求していくことは、既にその映像と共に生きていることになる。この序奏によって詩人の感覚は研ぎ澄まされて、第II連以下、第IV連までの凍結された永遠の若者や、愛や木や自然の風景、それに町の姿が浮き彫りにされてくるのである。感覚に訴えるものが如何なるものであるか、凍結されたものが如何に生き生きと甦ってくるかは、見る者の主体的な創造作用に係ってくる。

耳に聴える音楽は美しい。しかし耳に聴えぬ音楽の方が

更に美しい。だから、あなたのやわらかな笛の音を奏でておくれ。
 感覚の耳にはなく、もっともっと内奥の相慕うものに、
 音のない歌を、魂に吹き鳴らしておくれ。

(第II連1—4行)

大理石の壺から音が出るのではない。笛を吹いている青年の絵を見て、感覚的に呼び起す歌である。それがもっと高められた魂にまで吹き渡るのである。感覚の内奥に響き渡っているもの、過去の音楽のうちから自然と鳴り響いているもの、そういうものを呼び覚ますのである。美的感覚は過去の体験を再び対象の中に見い出す形であって、しかも沈潜の中に浮び上ってくる感覚的記憶でもある。キーツの感覚が研ぎ澄まされていることは、絶えず耳に聴えぬ音楽が鳴り響いているように、生の鼓動が鳴り響いているからである。沈潜していく内に鳴り響いてくるメロディーは、^{まきは}牧場の歌でもあろう、また恋の歌でもあろう。壺に描かれている一瞬の生態が、永遠に壺に固定されてしまったが為に、時間が無くなっていつまでも同じ状態を保ち続けているのである。

美しい若者よ。おまえは木の下で、いつまでも歌を歌っている。

木々の木の葉はいつも落ちることもない。

大胆な恋人よ、決して決して口付けはできないのだ。

すぐそこに唇はあるのだが。でも嘆き悲しむな。

彼女は色あせることはない。幸福を得ないが、

とこしえに愛し、とこしえに彼女は美しい。

(第II連5—10行)

若々しい青年、瑞々しい緑の木々、潑刺とした恋、今にも届きそうな唇、バラ色に輝く乙女、等がくつきりと浮び上
ってくるように、感覚的に写し出されている。正に合わされんとする唇が凍結されてしまったことによって、いつま
でも動き続けることになってしまった。いつまでも愛し続け、いつまでも若々しい。満たされぬ若者の恋が嘆き聞え
る一方、永遠に愛し続けられるのではないかと説得する口吻が伝わってくる。陶醉への寸前、完結への一瞬、満たさ
れぬ満足こそ、いつまでも前進し続けるのではないか。成就した暁には、沈滞と衰微と死滅とが訪れてくるのではな
いか。生命の漲る若々しさを永遠に保ち続けているあなたが、ずっと幸せではないか、と言いつつ聞かせている内
に、美望を覚えると共に、緑の木々、流れ出る新しい歌、喘ぎ求められる恋といった、若々しさが滔々とあふれ出
きて、生のエネルギーを感じとることになるのである。

ああ、幸福な、幸福な枝々よ。あなたは木の葉を散らすことはない。

また春に別れを告げることもない。

そして、幸福な楽士よ。疲れを知らず、

とこしえに笛を吹き、とこしえに新しい。

更に幸福な恋よ。はるかにはるかに幸福な、幸福な恋よ。

いつまでも暖かく、いつまでも悦びのある恋よ。

とこしえに恋こがれ、とこしえに若々しい。

息づく人の情熱よりも、はるかにはるかに越えた恋。

深い悲しみの心と飽満な心とを残し、また

燃える額と、欲望に渴えた舌とを残すあの情熱よりも。

この第Ⅲ連は第Ⅱ連を更に深く幸福を突き詰めている。幸福な、という気持の背後には、誠実に生きていたギーツの血の滲むような苦悩を知る思いがする。人間の情念の悶えと索漠たる気持を知れば知る程、暖かく悦びのある恋を祝福したくなるのではないか。春の若葉を保ち続ける木、いつまでも鳴り響く笛の音、とこしえの恋。こう見る背景には、現実の枯れゆく木々、跡絶えた笛の音、満ち足りた恋の後に襲う故知らぬ物悲しさ、あきあきとした気持、更には情熱の悶え苦しみ、といったものをたちまちにして思い浮べているのである。この人間の焦熱の苦しみの現状と比べれば、凍結された絵の現実の方が更に幸せではないか、永遠に若々しい生命を保ち続けるのではないかと、そう思う心に到る。心から詠嘆の吐息が漏れる時、幸福が実感として沸いてくる。美しさが凍結されているということは、永遠に同じ状態を保ち続けるというよりは、永遠に新しく、永遠に若々しい生命が流れ続けることであると言っている。凍結された美の永遠の生命の持続こそ真ではないだろうか。永遠の生命を持つことを真とするならば、永遠に新しい生命が沸き出すことこそ美であり、真である。絵を見ているうちに、人間の情熱の悶え苦しみの世界から、暖かく、悦びのある世界に心が高められていくのである。

一体どんな人達があの生贄の儀式にやっけて行くのだろうか。

どんな緑の祭壇に行くのだろうか。おお、神秘的な僧侶よ。

青空の下を鳴きながら、若い雌牛が連れられていく。

絹のような滑らかな脇腹に、花輪を飾りしめて。

どんな小さな川辺の町なのか、海辺の町なのか、

平和な砦で護られた山上の町なのか、

この敬虔な朝に、人々が全くいない町というのは、
 そして、小さな町よ、お前の通りはとこしえに
 静まり返っているであろう。人っ子一人戻って帰ってきて、
 答えてはくれない。何故荒涼としているのかを。

(第IV連1—10行)

田園の緑と青空と、朝の輝きと花の色が視覚的に、牛の鳴き声が聴覚的に訴えてくる。厳粛な朝の牧歌的な野、それにひき比べて人一人いない荒涼とした町はどこにあるのだろうか。ここでは壺には描かれていない想像の世界に小さな町を描き出そうとしている。川辺か海辺か山上か。その静まり返っている町は想像の彼方にある。人々の行列は森に向って進んでいく。その内の一人がどこの町から来たかを教えてくれたら、と思った瞬間、実在の壺のたたずまいに意識が立ち戻ってしまったのである。

おお、アッティカ風の姿よ！ 美しい姿態よ！

大理石の男や女達を浮き彫りにして、綾なす縁飾り、

森の木々の枝、踏み敷く草々よ。

沈黙の姿よ。お前こそ我らの思考を悩まして、

我らの観念を連れ出す^{いだ}。

永遠なんぞがするように、冷たき牧歌よ！

年古りて、我らの世代を無にしても

お前だけは留まろう。我らと異なる苦悩のさ中に、

人の友なるお前こそ友なる人に、こう告げる。

「美は真にして、真は美なり」と。それこそ

お前がこの世で知る全て、お前の知るべき全てなり。

(第V連1—10行)

現実の壺に目覚めた時に、思わず出た言葉「美しい姿態よ」(Fair attitude) というこの感嘆の言葉こそ壺全体を美として認識した言葉であって、簡素で清浄で洗練されたアツティカ様式の調和のとれた壺に、美が具現化されているのである。形そのものの均勢の美を見い出すと共に、浮き彫りにされた草や木や男女の縁飾りのあるたたずまいに相對することになる。目覚めた意識の中で見る壺は、何も語ってはくれない。ただ沈黙している。思考する力を失い、想像する力を失ってしまったからである。壺だけが永遠に実在している。時間の観念は壺だけが永遠の現在を有している。事物のもつ永遠の現在性こそ真ではないか。壺に向って、「冷たき牧歌よ」(Cold Pastoral) と呼びかける時、そこには壺自身の冷たい大理石を感じ、沈黙した壺の実体を感じる一方、縁飾られた絵によって、花のような物語を聞く思いがする。暖かく、のどかなほど田園的で、自発的な歌声が聞えてくるのである。この言葉こそ対象の冷やかさと、自己の感情の温かさの入り混った言葉と言える。人間は衰え死んでゆく。しかしまた新しい世代が生れ継いで、新らしく生きていく。そんな時「美は真なり、真は美なり」と壺は人に言い続けるであろう。

(三)

美とは何か、真とは何か、と直接に問うのではなくて、壺を通して美と真のあり方を詩の中に捜してみようとした。壺は美を有し、真を有する。なぜなら一瞬に凍結された現在が、永遠性を有しているからである。壺といった実

体、描かれた絵といった影、実体と影に永遠なるものを捜し求めていく。美を追い求める想像力は永遠普遍なるものを描き出そうとする。時間を超えていつまでも若々しい生命を漲らせることではないか、暖かさや悦びを持つことではないか、と。実体そのものは沈黙している。しかし実体から派生する美を把握しようとして、見ることに真相に迫り自覚的な生を表出しようとする。表出しようとする意志を持つことは創造^{ポイエシス}であって、ポイエシスの内に、生のものなるかを意識するのである。ポイエシスは永遠普遍なるものを持つとする。プラトンの「魂の不滅」が美意識の内に創造されるなら、美は真なり、真は美なり、として理解し得るのではないか。

(一九七六・秋)

参考文献

- ① The Well Wrought Urn. Studies in the Structure of Poetry——Cleanth Brooks. (University Paperbacks. Methuen: 1971年版) 中〇〇章 'Keat's Sylvan Historian: History Without Footnotes. 引用の要約文は p. 125—p. 126 の
- ② プラトンI 世界の名著6 (中央公論社 昭和41年) の p. 559
- ③ The Romantic Imagination——Sir Maurice Bowra. (Oxford Paperbacks: 1966年版)
- ④ Keat's View of Poetry——Takeshi Saito (Cobden—Sanderson 1926年)
- ⑤ 美学 井島勉(創文社・昭和49年)
- ⑥ 英詩—鑑賞と分析 小川和夫(研究社・昭和46年)
- ⑦ English Romantic Poetry—An Anthology—上島建吉(研究社・昭和42年)
- ⑧ キーツの手紙 松浦暢(吾妻書房 1974年)
- ⑨ Keats—Shelley Journal volume IV. Winter 1955. 中〇 The Ode on a Grecian Urn——Martha Hele Shackford.